がん患者力

治療と仕事の両立

学び語り 悩み解消

がん患者の2人に1人は、20～60代の働く世代だ。経済的な理由だけでなく、生きがいのためにも、治療中やその後も働きたいと考える人は多い。こうした声に応えようと、医療現場や企業で就労を支援する取り組みが始まりつつある。国もようやく、重い腰を上げた。

治療と仕事の両立について意見交換しあう参加者たち。雑談から話が弾む＝東京都中央区の聖路加国際病院

病院 復職・通院を支援

「再就職する際に、履歴書や面接で病気のことに触れる必要があるでしょうか」。看護師の橋本久美子さんの問いかけに、各参加者が次々と意見を述べた。

聖路加国際病院（東京都）は昨年12月、乳がん患者を対象に治療と仕事の両立を支援する「就労リング」を始めた。1回60分、計3回の集団セッションだ。橋本さんと医療ソーシャルワーカーの牧祥子さんを進行役に、休職中の過ごし方や労働法など様々なテーマについて話し合う。

8月下旬のセッションには4人が参加。その1人、東京都内に住む女性（39）は昨年4月、妊娠と同時に乳がんが見つかった。6月に手術を受けた後、出産を控えていたこともあり退職した。可能なら来春には再び勤めたいと考えている。

「ずっと働いてきたので、辞めた当初は心にぽっかり穴があいてしまった。育児も楽しいけど、『仕事って面白い』という姿を子どもにも見せたい」

就労リングは厚生労働省科学研究の一環として始まった。参加者18人にアンケートしたところ、知識が増えただけでなく、情緒面も改善したことがわかった。今年6月にあった進行役の養成講座には全国25病院から50人が参加。今後、全国に広がると期待されている。

主任研究者の同病院乳腺外科部長・山内英子さんは「これまでは仕事に対する患者の不安が見え隠れしても、どこにボールを投げればいいのか悩んできた。医療者も知識を持つことで、患者と仕事について話題にできる」と話す。

帝京大病院（東京都）乳腺科では、NPO法人キャンサーリボンズが作成した「『がんと働く』リワークノート」を患者に配布している。職場復帰に向けたチェックリストや治療と仕事の年間見通しを書き込むページがある。1冊300円で同団体のウェブサイト（http://www.ribbons.jp）から購入できる。

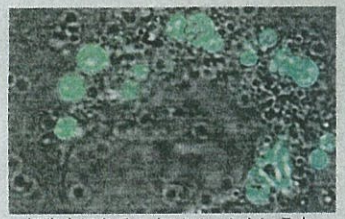
「がんになったら仕事は続けられないと思う人が多い」と看護師の小野智恵美さん。「患者さんの不安を探り、社会復帰が可能だと伝えることが重要です」

江戸川病院（東京都）放射線科は2009年5月、仕事を終えた後に通院できるようにと午後6～10時の「夜間外来」を開設した。1日約80人の患者の4分の1は、夜間に通院する。

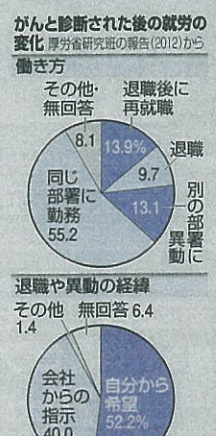
放射線照射自体は1回数分で終わるが、通院回数が多い。乳がんの手術を受けた東京都葛飾区の仙波紀子さん（61）は今年7～8月、保育園でフルタイムで働いた後、午後7時半からの治療を30回続けた。「園を休むことなく治療を続けられて本当に助かりました」

放射線科部長の浜幸寛さん（41）は28歳のときに脳腫瘍が見つかり、手術後に1カ月ほど休んだ経験がある。復職直後には勤務を軽減して周囲に迷惑をかけたという思いもあり、夜間外来に踏み切ったという。

ただ、夜間の外来は診療報酬上は昼間と変わらないにもかかわらず、スタッフの人件費は割り増しとなり、病院経営上は厳しい。浜さんは「がん患者の就労を支援するなら、こうした取り組みをする病院の負担が増えない仕組みも必要ではないか」と指摘する。



細胞内にあるエクソソームという小粒子（発光部分）が分泌され、がんの転移に重要な役割を果たしていることが分かり、注目を集めている＝国立がん研究センター研究所提供



民間 経験生かし助言

人材派遣大手パソナグループ（東京都）は昨年3月から、治療と仕事の両立に悩むがん患者が語り合う場として、「サバイバーシップ・ラウンジ」を開いている。勤め人が参加しやすいようにと月1回平日の夜、JR東京駅近くのオフィスを使う。今年9月までに延べ186人が参加した。

担当の本橋恵里加さんは「がんと診断された人の3割が退職している事実に驚いた。がん経験者同士が話し合い、悩みの解決につながればと始めた」と話す。

ラウンジは、がん患者の就労問題を支援する民間団体「CSRプロジェクト」との共催。「復職のタイミングを会社にどう伝えれば」などの悩みに、各自が経験を話したり、社会保険労務士が助言したりする。

CSRの藤田久子理事は「いつ、誰に伝えるのか。就業規則がどうなっているのか。何から手をつけていいかわからない。悩みを打ち明け、助言を得て、問題をクリアしていく人が多い」と話す。

パソナは働き方のモデルを提唱することも検討している。「会社の規模や文化が違うので問題も複雑」と同グループの大森英夫パソナライフケア副社長。「もう少し皆さんの声を集め、短時間勤務や在宅勤務のあり方など、治療を続けながら働き方を選択できるような仕組みを模索したい」

国 対策予算2

厚労省研究班の03年の調査によると、がんと診断された後、31％が依願退職し、4％が解雇されていた。12年の別の調査では、診断後に24％が退職、13％が違う部署に異動していた。退職した経緯は、52％が自分の希望、40％が会社からの指示。全体の45％が診断時より収入が減っていた＝グラフ。

国は昨年度まとめた「がん対策推進基本計画」で、がん患者の就労支援対策について初めて盛り込んだ。今年度は、がん診療連携拠点病院で社の雇用を進めるのために退職職を支援するーターを全国ーワークに配円の予算を組定年の延長にがん患者が予想される。センターの高パイバーシッ長は「がん患多くの場合同だから働けるのは企業に個々に応じて

万能なウイルス療法 研究

東大医科学研究所 先端医療研究センター教授
藤堂 具紀（とものり）さん（52）

東京大卒。米ハーバード大マサチューセッツ総合病院教授などを経て、11年から現職。

未来を創る

手術、抗がん剤、放射線治次ぐ「第4の治療法」になるしれない。ウイルスでがんをつける「ウイルス療法」の実に向け、研究と治療を続ける治療に用いるのは、200に開発した「G47Δ（デルタ）」と呼ばウイルスだ。口唇の周りに水れなどを起こす「単純ヘルペイルスI型」の約80個の遺伝うち、3個に改変を加えた。

「このウイルスを患部に注れば、がん細胞の中だけで

日本対がん協会から

「乳がんは勇気に弱い」クリーム色の背景に、国語の穴埋め問題を思わせる明朝体の1行コピー。正解の赤丸がピンクリボンの形でアクセントになっています。シンプルながらストレートに訴えかける強さが感じられる作品です。

今年のピンクリボンデザイン大賞はポスターデザインに絞って募集し、コピー自体は過去の受賞作品を用いました。応募622点の中から、審査員の全員一致で大阪の大学生がグランプリに輝きました。

10月は乳がん月間。今年も各地でさまざまに乳がん征圧のための活動が繰り広げられます。

日本対がん協会では、ピンク色を身に着け街を練り歩いて啓発するスマイルウオークを5日に東京ミッドタウン、12日に名古屋・久屋大通公園広場、20日に神戸・東遊園地、26日に仙台・勾当台公園で、また最新のがん情報を学ぶシンポジウムを6日に東京・有楽町朝日ホール、19日に神戸国際会議場で開催します。

現在、日本人女性の15人に1人が乳がんにかかり、年間1万2千人以上が亡くなっています。検診の受診率が低いため進行がんで見つかる場合が多く、死亡